

研究助成（2010年度募集）研究実績報告書

代表研究者	兵庫医療大学リハビリテーション学部 作業療法学科 講師 佐野 恭子
研究テーマ	高次脳機能障害者と家族における協働関係と主体性の構築に向けた支援 - 家族会活動を通して -

< 助成研究の要旨 >

1. 目的

病気や事故により脳が損傷されると、注意、記憶、思考や作業能力、社会性などが障害される。これを「高次脳機能障害」と言い、その種類や程度によっては生活に深刻な支障をきたす。しかし医療機関でのリハビリテーション後に委ねられる地域資源の活用には限界があり、発症・受傷後長期を経た高次脳機能障害者と家族の中には、地域から孤立するだけでなく家族としてのつながりすら危うくなるケースが見受けられる。本研究は、参加者（高次脳機能障害者、家族を含む）が積極的に活動する環境や協力し合う関係を作ること、高次脳機能障害者と家族それぞれの話を聞き取り、心理・社会的側面から具体的な支援を提供すること、を主な目的に、ある家族会を支援しその意義を検討するものである。

2. 支援の結果

1. に挙げた目的に添って、以下に概略を述べる。

参加者が積極的に活動する環境や協力し合う関係を作ること

研究期間内に10回、家族会の定例会プログラムを企画・実施した。内容は、作業療法の視点（高次脳機能障害者にとっては治療的、家族にとっては教育的、両者にとっては協働作業的）を取り入れ、「考える・感じる」「話す・聴く」「作る」の要素を含むものとした。結果として、特定のプログラムでは目的はおおむね達成され、研究期間後も継続したいとの意思が参加者から出された。

高次脳機能障害者と家族に心理・社会的側面から具体的な支援を提供すること

希望者あるいは支援が必要と研究者が判断した定例会参加者との間で、相談や往復葉書の交換などによって情報や困りごとを共有し、家庭内コミュニケーション、地域資源の紹介・定着などに関して、具体的な支援を個別に行った。聞き取りや質問紙を用いて研究期間の前後で比較したところ、高次脳機能障害者自身の社会的スキルに対する認識、家族が感じる負担感や家族としての機能などに変化が見られ、心理・社会的支援が一定の影響をもたらした可能性がうかがわれた。

3. 今後の課題

今後の課題は以下のとおりである。

- (1) 家族会活動に高次脳機能障害者と家族の意見をより反映させられる様、支援形態を漸次変更する
- (2) 個別の支援（本研究では目的 に該当）により重きを置き、（家族会活動を含む）社会生活に対して、高次脳機能障害者と家族がそれぞれ、または一緒に取り組む気持ちになれる様に支える
- (3) 本研究の過程で得た地域の支援者や県との関係を活用し、既存の公的サービスの枠にとらわれない（例：専門職ボランティア）現実的な支援のアイデアを探る